

## 第2章 銃後

### 勤労動員② 「北海道・美瑛」 製鉄所で捕虜と共に

野村武雄さんのお話から

○盧溝橋 中国北京の近郊の盧溝河に架かる橋。昭和十二年日中戦争の発端となった事件があった場所。

○演習 軍隊が実戦の状況を想定して行う訓練。

私は美瑛というまちで生まれました。尋常小学校三年生のある日、全校生徒が運動場に集められました。校長先生はいつもと違ってとても怖い顔をして壇に上がりました。「みなさん、よく聞いてね。先日の七月七日、日本の軍隊とお隣の中国の軍隊が盧溝橋という橋のそばで戦争になってしまいました。」とお話されました。

美瑛には陸軍大演習場がありました。ソ連の攻撃にそなえて兵隊が演習をするところです。大砲の射撃訓練をするので、夏になるといつも大砲の音が聞こえていました。校長先生のお話を聞いて、みんなシーンとなりました。ちょうどそのとき突然ドドーンという大きな音。みんなは一瞬こわばりました。それは射撃訓練の音でした。「これからどうなってしまうのか……?」まだ小学校三年生でしたから全然わかりませんでした。

だけど、「何かが変わるのではないだろうか……?」とは思いました。それまでは、隣のおじさんが兵隊さんに行くという事は遠い世界のことでした。しかし、校長先生のお話を聞いて、私は小さな胸の中で「何かがおきるのではないかな」と、とても心配になりました。四キロの道のりを息を切らせて家へ帰りました。母は田んぼの草をとっていました。「タケ、どうしたの?」「校長先生がね、戦争が始まったとき。」「えっ……。」と、母は驚きました。「これからどうなるんだろうか……?」「隣のおじさんは兵隊に行っただけけれど、おじさんはどうなるのだろうか……?」。もしかしたらおじさんが死んでしまうのではないかと、初めて考えました。これは私が戦争というものを初めて知ったときのことです。

○召集 しゅうじつ 人を軍に呼び集めること。

○徴用 ていよう 強制的に動員させること。

○ウサギ・犬猫毛皮献納 けんなん 運動 太平洋戦争時、ウサギの毛皮を兵士の防寒用具に使うため、各地で行われた運動。末期には飼犬や飼猫なども供出された。

昭和十六年、私が十四歳で国民学校高等科の二年生のときに太平洋戦争が始まりました。たくさんの人が召集を受けて兵隊に出ていきました。川向かいのおじさんが中国で戦死したと聞き、母と一緒に遺骨を出むかえに行きました。真っ白い箱の中に遺骨が入っているとわりました。このおじさんは私をとてかわいがってくれて、いつも肩車かたぐるまをしてくれました。このおじさんがこの白い箱に入って帰ってきたのです。おばさんはじつと下を向き「お国のために死んだのだから涙は出ないよ」と言いながらがまんをしていました。

美瑛でも召集されたり、戦死したりする人がふえてきました。家によっては働き手が一人、二人と減へっていきました。まわりの家（今で言えば町内会、部落会）がお手伝いに行きました。私も草とりや稲いねかりなどのお手伝いに行きました。だんだんと働ける元気な人が減へっていきました。そこで、この太平洋戦争が始まる前まで、夏の稲いねかりの時期になると学校は全部休みにしていました。学校を一週間なら一週間休みにしてお手伝いに行つたのです。

農耕馬も徴用ていようされるようになりました。馬が足りなくなつたのです。当時日本の軍隊は自動車をあまり使つかっていませんでした。馬に車を引かせて人や物を運んでいました。ですから農家の馬も減へっていきました。私の家の馬も徴用ていようされました。この馬が家を出るときに、大好きな燕麦えんばくを食べさせて「行ってこいよ。」と送りました。引かれていく途中、後ろを振り返りヒヒーンと鳴いて、ぽろつと涙なみだが落ちたような気がしました。

北海道より寒い満州の兵隊さんのために毛皮がたくさん必要となりました。この毛皮も不足してきて、ウサギだけでは間に合わなくなりました。家で飼かっていた犬や猫ねこも供出きょうしゅつしなければならなくなりました。

私は国民学校を卒業して師範学校という現在の教育大学に入学しました。大学生たちはお

○製鋼 銑鉄とくず鉄とから鋼をつくること。

○捕虜 戦争などで敵に捕らえられた者。

○鬼畜米英 アメリカやイギリスを残酷な行いをする鬼と畜生にたとえたもの。

○中国や朝鮮の人 当時は、おもに軍需産業の労働不足が深刻化したため、学卒者、農家をはじめ、未婚の女子や学生、生徒、なかば強引に連れてこられた朝鮮人、中国人などを動員する勤労動員が行われた。

手伝いのために室蘭に行きました。室蘭には大きな製鉄所や製鋼所がたくさんあり、そのほとんどは、軍艦や大砲などをつくる材料をつくっていました。

製鉄所内には連合軍側の捕虜収容所があり、日本がシンガポールで戦争したときのイギリスの捕虜がたくさん連れてこられていました。私たちは捕虜たちと一緒に仕事をしました。私たちはこの捕虜たちのことを鬼畜米英だと思っていました。しかし、会ってみたらとてもよい人たちなのです。仲間に英語を少し話せる人がいたので、休み時間にこっそり話をしました。彼らは「君たちはなかなかいいチルドレンだ。もうすぐ日本は負ける。君たちはよく働くから、イギリスでも広い農場をつくっているからそこで雇ってあげるからね」と言うのです。本当にびっくりしました。鬼だと思っていた人たちが、とても優しい人たちだということがわかりました。彼らは兵隊ではない捕虜だったからなのです。そこでは、お隣の中国や朝鮮の人と一緒に働きました。みんないい人たちばかりでした。

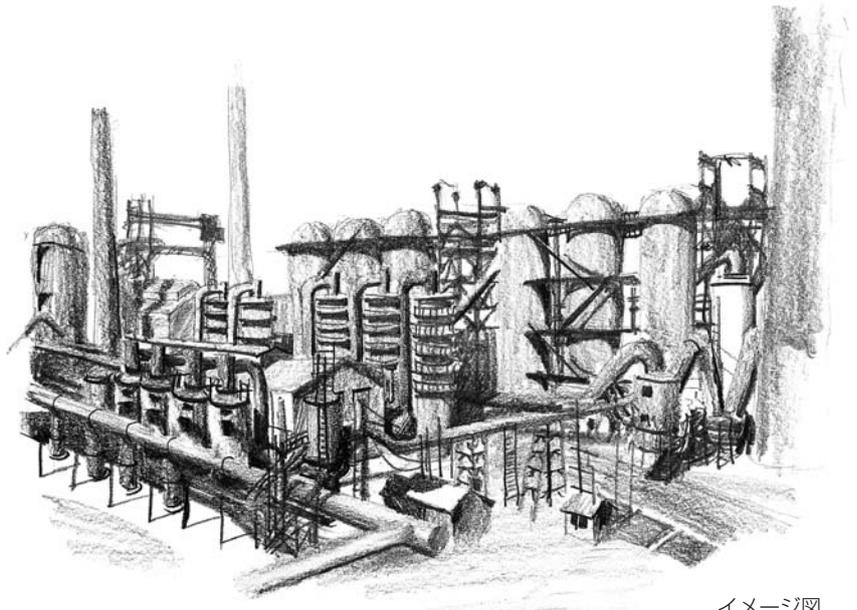
その後、空襲で室蘭が危険になってきたので、旭川に戻り援農をしました。昭和二十年七月十四日と十五日、敵機約二百五十機が北海道中に分かれて一斉に爆撃を始めました。ちょうど土曜日と日曜日でしたので、幸い、学校に子どもがいませんでした。その頃は、六年生まで



ウサギ・犬猫毛皮献納運動

イメージ図

した。その相手であるイギリス、中国の人がどうしてこんなに普通の人なのだろうと不思議に思いました。もし戦争がなかったなら、この外国人たちと仲よく話ができるかもしれないに  
 と思いました。不思議ですね。戦争になつてしまうと、みんなが「敵だ、敵だ」とお互いに思ってしまうのです。また、自分の国は「勝っている、勝っている」と思いこんでしまうのです。



イメージ図

日本製鐵の溶鋸炉

だけが学校で勉強をし、高等科はもう全部勤勞動員で学校の授業がなくなっていました。また、草原地帯で赤クローバーの種をとりました。クローバーは馬や牛の食べ物です。家畜に食べさせる物がそのころもうなくなつたので、小学生がそれを集めなければならなかつたのです。夏の間は山へ松の根をとりにいきました。松の根から油をとって戦車や飛行機の燃料にしたのです。

私は考えました。まだ学生で十六、七歳でしたけれども、どうして鬼畜米英なんて言つて戦争するのだろうかと。また、隣のおじさんたちが戦死しま

DATA

平成20年度手稲区平和事業  
 聴き取り  
 ・平成20年11月11日  
 ・稲積小学校



野村武雄(のむら・たけお)さん

・昭和3年(1928年)生まれ  
 ・札幌市手稲区在住